



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学



2012年  
3月発行  
通巻 第10号

# FDニューズレター

Hokkaido  
Information  
University

## 巻頭言

### 教育の原点とは？

教養部長 平子 玲子

#### FD華やかな時代に

本学の『教育GPニューズレター』Vol.6によれば、Faculty Development が成立してほぼ50年とのことである。1960年代から1970年代にかけてアメリカで始まったこの動きは世界へと広がり、社会の変化・社会的なニーズに対応して今や日本の大学を席卷している。本学は文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」に選定されて、平成20年～22年の3年間にわたって全学的な取り組みが行われ、現在新しいフェーズを迎えている。

#### 筆者の大学時代

筆者はちょうどアメリカでFaculty Developmentが始まった時期に高校・大学時代を送った。ある私大の文学部史学科に入学したが、そのころの授業は講義形式が全盛であった。有名な日本中世史研究の権威が非常勤講師で出講していた。その先生の講義は、先生がノートの一節を読み上げ、受講生は一字一句をもらさずノートするというものであった。したがって先生は読み上げてから受講生がノー

トに書き留めるのを待っているのである。そして大半が書き終えた頃合いを見てさらに次を読み上げるといふ具合であった。イエローノートという言葉があったがまさにそのものであった。当時「双方向的授業」などという用語さえ知らない筆者は、「ああ、これが有名な先生の授業なのだ」くらいにとらえていた。多くの「〇〇概説」という講義もそうであった。先生が話し、時には板書することをノートするのである。著書を読めばとてもわかりやすく書いてあるのに、話を聞くと理解しづらいという訥弁の若き先生もいた（この先生は今では西洋近代史研究の第一人者である）。

ここで感じたのは、研究者として一流であることと、教育者として優れていることとは比例しないということであった。ただ当時の日本の大学においてこれは問題とはならなかった。あくまでも研究者としての力量を教員選考の基準としていたのであろう。また学生もユニバーサル時代を迎える以前の学生であったからこういう授業に耐え得たのだと思う。筆者が進んだ大学院においても、「〇〇講義」という授業は担当教員の学説を聞き、それをノートするという形式であった。ただし大学と異なっていたのは、自由な質疑応答が交わされたこと。また

## 目次

- 1. 巻頭言…………… 1
- 2. 2011年度FDフォーラム  
開催される…………… 3
- 3. 教育GPの現地調査の報告 6
- 4. EDUCAUSE 2011  
参加報告…………… 8
- 5. 平成23年度「学生満足度  
調査」概要…………… 10
- 6. 24年度FD関連事業に  
ついて…………… 12
- 7. 学生FD活動 –学生による  
全学ゼミ説明会–…………… 14
- 8. FD活動 行事 (実績・予定)16
- 9. FD委員会WGの活動実績16
- 10. 編集後記…………… 16

ゼミナールにおいては忌憚のない自由な議論が保障されていたことであった。学問の世界で切磋琢磨するということを実感したのはこの院生時代であった。

### 心に残る二冊の本

まさか自身が大学の教員になろうとは思っていなかったが、学生時代に読み、今も心に残る二冊の本がある。そこには教育にたずさわるものの原点が示されているのではないかと思うので簡単に紹介させていただく。

一つはフランスの詩人ルイ・アラゴンの詩集『フランスの起床ラッパ』（大島博光訳編）。筆者の手元にあるのは奥付に1964年、第3刷とあるから学生時代に早稲田界隈の古本屋で購入したものと推測する。このなかの「ストラスブル大学の歌」を筆者はこよなく愛している。ストラスブルは独仏国境に近い町、1940年フランス政府がナチスドイツに降伏すると、ストラスブルはいちはやくナチの軍隊に侵略され、大学は奪われ、学生たちはリュックサックを背負って、フランスのまんなか、クレルモンの町に疎開してそこにふたたび大学をひらいた。この殉難の大学に対してアラゴンが送った励ましのエールがこの詩であった。

#### ストラスブル大学の歌

(一連目略)

学生たちは別れを告げて逃れ出た  
アルザスの空翔ぶ鶴と  
おまえの薔薇形窓の思いでを  
いっばいつめた背負袋を肩に  
大急ぎで 時を争い

.....  
教えるとは 希望を語ること

.....  
学ぶとは誠実を胸にきざむこと  
彼らはなおも苦難のなかで  
その大学をふたたび開いた  
フランスのまんなかクレルモンに  
(傍点は引用者)  
(後略)

三連目の冒頭の二行には教育にたずさわる者が胸に刻むべき初心があると思う。教育とは高みに立って行うのではなく学生と同じ目線で彼らに語りかけること。同時に彼らから学ぶ謙虚な姿勢を忘れてはならないということと筆者は解釈している。

もう一つは『どぶ川学級』（須永茂夫）。複雑な背景は省略するが、いわゆる貧困な教育環境のなかで、劣等生として学級で白眼視されている工場労働者の子供（中学生）たちを相手に奮闘する、大学中退のいわか仕立ての塾教師の記録である。塾の名前が「どぶ川学級」である。ここでは教える・習うという行為そのものが最初は成立しない。それを成立させるものは生徒の教師への信頼であるからだ。また生徒も親が行けというから来ているものの勉学意欲を持っていない。このようなスタート地点での両者の齟齬。これを教師須永は生徒と接することで一つ一つ解きほぐしていく。このとき叫んだある生徒のことば、「俺なんか学校にいても、ただ黙って六時間も机に座っているだけだよ。ちょっと隣の奴と話をすると、うるさい！騒ぐならでていけと先公はいうだろう。勉強もわからないで一日中座っている苦勞がわかる？」。こうしたホンネのぶつかり合いのなかから、「学びたい。勉強がわかるようになりた

い」という意欲を引き出していく。そこではじめて学習の場が成立していくのである。意欲を持った中学生たちの成績の伸びはめざましかった。そして成績向上という成果以上に、努力する姿勢に須永はすばらしさを発見している。

ここで学習の場を成立させたのは信頼関係に立った教師と生徒の切り結びである。ここにあるのは双方向的な授業である。生徒の声に耳を傾け誠実にそれにこたえようとする教師の姿勢である。これはいかなる場であろうとも教育という実践に不可欠なものを示していると思う。

### 教師が喜びを感じる時

自身の大学での授業実践が十分なものとはつゆいささかも思わない。ただ筆者が授業をしていて喜びを感じる時はどういう時なのかを考えてみた。結論を先にいえば、受講する学生との切り結びを感じる時である。具体例を示した方がわかりやすいと思うので、昨年度後期の「歴史学Ⅱ」について記す。日本の近代から現代の流れの中で、女性と男性の置かれた位置を比較しながら歴史を学ぶ。権利・教育・民法・刑法・平時・戦時など、さまざまな局面から考察する。

毎回講義内容についての疑問・質問と感想を書いてもらい、次回の授業で質問・疑問に答え、感想のいくつかを紹介している。最終回には半年間授業を受けた感想を書いてもらっている。今年度の最終回の感想をいくつか紹介する。

・日本の歴史における男女差別が激しく、女性が不遇な立場に

置かれていたことを知り、また現在でも日本は世界的に見て男女差別が強い国であることが印象に残り、おどろきました。これから生きていく上で、もっと男女平等について考えていきたいと思いました(3年男子)。

・この講義を受けなければ過去・女性がどんなに苦しんでいたか知ることはできなかったと思います。自分から歴史について調べてみようという気になりました(3年女子)。

・授業を受ける前は男女間の差は現在ほとんど残っていないと

思っていたが、昔の女性が想像以上に差別され、多少は解消されたとはいえ、現在にも根強く残っていると知り、私たちの世代がこの問題を解決するために動かなければならないと感じた(3年男子)。

・この授業からまだ知るべき日本の歴史があるのではないかと思います(3年男子)。

・もっと深く知りたいことがたくさんあったので、そこは自分自身で調べていきたいと思いました。後はテストを頑張ります(3年男子)。

授業への注文として、「日本ってよい国だなと思える事件はなかったのでしょうか(3年男子)」「もう少し書かせる授業をしたらいいかもしれない(3年男子)」という感想もあった。

このように学生が歴史を学ぶことにより、現在をとらえかえそうという意識を持つこと。自ら知りたい・調べたいと思うこと。そのようなきっかけを与えることができたと感じたとき、ささやかな喜びを感じるのである。

(2012.3.11記)

## 2011年度FDフォーラム開催される

### 全学教務FD委員会・WG4 谷川 健

2010年度までは、2008年度に採択された教育GPの一環としてFDフォーラムを開催してきました。本年度は本格的な運用を開始した本学のICTを利用したFD活動元年として、2012年3月2日13時から17時に本学211教室で、FDフォーラムを開催することができました。2011年度のFDフォーラムは、「教職員と学生の協働で変える大学の未来」をテーマとして、2部構成で実施されました。第1部では、北海道大学教授の鈴木誠先生による「やる気のない学生に何が

必要か - 意欲を引き出す授業デザイン-」と題する講演、第2部として、学生の活動報告を含めた本学のFD活動の報告がなされました。

本学の近藤事務局長の司会のもと、本学学長の長谷川先生の開会挨拶の後、第1部の北海道大学の鈴木誠先生から「やる気のない学生に何が必要か - 意欲を引き出す授業デザイン-」についての講演がありました。鈴木先生は、民間企業を経験された後、中学の教員、高校の教員、大学の教員と豊富な教育経験をお持ちです。これらの経験を通じて、学生にどのように自信を持たせて意欲を持たせるかに関する豊富な知見を得られました。それまでに自信を無くし知識なども乏しい学生に対して生物を教えるの



長谷川学長の開会挨拶



に、教授方法を再構成することから初めて、教科書どおりではない教え方で、ほんものとの直接体験を徹底し、生徒を授業の主役に引きずり出さず方法で、商業高校における生物の授業で、学生のやる気を引き出すことに成功した事例が紹介されました。やる気（意欲）にはいろいろな形態があり、目に見える形で意欲を表現できるもの、やりたいという気持ちはあるが意欲が表面に現れにくいもの、意欲があるができないことを他のせいにするものなどです。この意欲と関連した重要な能力が自己効力（Self-Efficacy）です。自己効力とは、「学習場面に直面したとき、その課題を自分の知識や技能などによってうまく処理できるか否かという、学習への能力についての自信や信念（私にもできるかもしれないと思える）」のことです。自己効力を構成するものとして、自己をコントロールする力（統制感）、努力・能力・教師の存在、自己評価・自己制御、周囲の期待・教える役割、適切な勉強の仕方などがあります。自己効力を養うためには、教員が明確にその意図をもった授業をデザインし、学生を常に観察することが大事です。特に、目標を明確にする、適切な授業形態を選ぶ、教材の準備、評定ではない評価が重要です。目標は、一般目標（科目の理念・狙い・育成したい資質）、到達目標1（科目で獲得できる（すべき）知識や態度・スキル）、到達目標2（コマごとのより具体的な到達目標）を設定し、コマごとの到達目標はより具体的に示すことが、学生の自己評価・自己制御を促すこととなります。授業形態は、学生がより主体的に学べるように、グループ学習、体験学習（討論、調査、実験、自習）を積極的に取り入れると良いようです。この講演を通じて、学生に「私もできるかもしれない」と思わせる

ためには、教員が本気でそうなることを信じて、教材や授業形態などにそのための仕組み（工夫）を取り入れ、学生が何をすべきかを明確にし、常に学生を観察しほめることが大事だと思いました。今後ますます、自信を無くした学生にどのように自信を取り戻させるかが重要になります。鈴木先生の紹介された「やる気」を持たせる工夫は、3×6は16というレベルの高校生から北海道大学の1年生まで幅広い層を対象にして成功しており、本学でも大いに参考になると思われます。本学の学生のレベルをうんぬんするまえに、この講演で指摘された内容を思い出して、やる気を起こさせるための授業に取り組んでみようではないでしょうか。

第2部は、FD活動の報告がなされました。最初に全学教務・FD委員会の委員長で副学長の富士先生から、FD活動の概要が報告されました。藤井先生からは、WG1の活動として授業評価アンケート、表彰制度などについて報告があり、授業評価アンケートの自己分析についてはより入力しやすく工夫したとのことでした。向原先生から、WG2の主たる活動であるピアレビューが定着し、授業観察から授業参加への新たな流れができつつあることが報告されました。WG3の豊田先生から、GPAが2011年度から本格的に導入され、教員間のGPAの格差、学生への周知徹底などの課題とその対策が報告され、より踏み込



鈴木誠先生の講演(1)



鈴木誠先生の講演(2)

んだ利用には制度的な整備や効果の見極めが重要であることが指摘されました。谷川先生からは、ICT関連の研修会、授業におけるICT利用の状況、PDCAのActionを支える5分でわかるFD研修などのコンテンツ作成などに関するWG4の報告がありました。サイモン先生からは、WG5の活動として2回目の研修を北海道情報技術研究所で開催し工夫をこらした新任教員研修の紹介があり、2012年度は国際FDフォーラムの開催を予定しているとのことでした。富士先生からは、WG8が主導したカリキュラムアドバイザーボードの紹介があり、この中で本学の卒業論文をボードのメンバーの方にレビューしていただき、その結果卒業論文の指導を徹底する必要があることがわかり、「卒業論文の書き方」作成WGを立ち上げたことの報告がありました。出張で不在の隼田先生にかわり尾崎先生から、今年度途中から活動を開始した「卒論の書き方」作成WGの報告がありました。報告では、本学の卒業研究に関する現状分析、卒業論文をどのように進めるかの指導の必要性が指摘され、「卒業論文の書き方」ではなく「卒業研究ガイド」を作成することになった経緯が説明され、「卒業研究ガイド」の目次（案）が提示され、2011年度末に完成を目指しているとのことでした。長井先生から、Own Teacher制度として採用した教育アドバイザーに関する学生のアンケートに関する報告がありました。中島先生から2011年10月に米国ペンシルバニア州フィラデルフィアで開催されたEDUCAUSE2011に参加した報告がありました。報告ではEDUCAUSEの組織についての説明があり、今年の特徴としては「クラウドコンピューティ

ングなどの活用によるITコストの削減」、「スマートデバイスの活用」、「電子テキストの利用」が中心的な話題であったことが示されました。藤井先生から2011年度から新設された学習者適応型eラーニング科目である「キャリアデザインIII」について報告がありました。この科目は、SPIや一般常識について問題を解いていくもので、今年度は3年生の後期に選択として実施されました。2011年に実施されたSPI試験では、ここ数年の中では良い結果が得られ、この科目の効果があったことが報告されました。情報メディア学科3年生の藤根君から、「キャリアデザインIII」の機能の一つであるソーシャル型学習システム（アクティブボード）の開発に関わった経験から、このシステムの概要や工夫した点やこの開発を通じて自分の得意な面、不得意な面が再発見できたことなどの報告がありました。最後に、学生FD委員会のメンバーである情報メディア学科3年生の知久君から、合同ゼミ説明会、じゃべり報大、外部の学生FD関連イベントへの参加などについての報告がありました。

2011年度は、CANVASを利用してPDCAに基づいた授業改善活動が本格的に開始しました。第1部の講演では、本学にとっても重要な課題である「いかに学生のやる気をださせるか」についての貴重なヒントがいただけたのではないのでしょうか。第2部の報告では、学生がFD活動に参加しつつある状況が確認できました。今回のFDフォーラムのテーマである「教職員と学生の協働で変える大学の未来」の第1歩としたいものです。



「キャリアデザインIII」開発メンバーの報告



学生FDの報告



## 教育GPの現地調査の報告

全学教務・FD委員会 委員長 富士 隆

### 教育GPとは？

文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」は、大学設置基準の改正等への積極的な対応を前提に、大学等から申請された、教育の質の向上につながる教育取組の中から特に優れたものを選定し、広く社会に情報提供するとともに、重点的な財政支援を行うことにより、我が国全体としての高等教育の質保障、国際競争力の強化に資することを目的にしたものです。

本学は、平成20年度に「ICTによる自律的FD推進モデルの構築」という取組名称で申請し、全国939件の申請の中から、本学を含む148件（16.8%）の取組みが採択されました。

### 教育GPの現地調査とは？

現地調査の目的は、教育GPの目的を踏まえ、各大学等の取組の実施状況等を調査し、優れた取組を広く社会に情報提供することにより、財政支援期間終了後の取組の持続的展開やその水準の一層の向上、及び今後の我が国の更なる高等教育の質の向上や国際競争力の強化に資することにあると記されています。

今回の調査の対象は、平成20年度教育GPに選定された取組148件について、3年間の財政支援終了後の翌年度である平成23年度に状況調査が行われました。

具体的には、本学を含む148件の取組に対して書面審査が行われ、大学では14件の取組が「特に優れており波及効果が見込まれる取組」として現地調査が行われました。本学の「ICTによる自律的FD推進モデルの構築」の取組は、その14件に選定され、平成23年9月22日（木）に現地調査を受けました。

### 他にどんな取り組みが対象となったか？

「特に優れており波及効果が見込まれる取組」として現地調査の対象になった14校は、次の通りです。（文科省の発表順）

筑波大学：筑波スタンダードに基づく教養教育の再構築

長岡技術科学大学：UDに立脚した工学基礎教育の再構築

島根大学：「環境寺子屋」による工学基礎教育の再構築

岐阜薬科大学：創薬学士力養成プログラム

立教大学：ビジネスリーダーシップ・プログラム

金沢工業大学：全入時代における「個」に対する数理教育

千葉大学：高度ビジュアル化による化学実験教育

東京大学：PISA対応の討議力養成プログラムの開発

東京工業大学：新入生科目「機械工学系リテラシー」の革新

長崎大学：地域医療人育成プラットフォームの構築

大分大学：学問探検ゼミを核とした高大接続教育

北海道情報大学：ICTによる自律的FD推進モデルの構築

関西国際大学：初年次サービスラーニングの取組

福岡県立大学：不登校・ひきこもりの援助力養成教育

### 現地調査の実施内容は？

次のような流れで、当日の現地調査が行われました。

- ① 取組担当者からのヒアリング・質疑応答
- ② 学生との面談
- ③ 教育現場・学習環境の視察
- ④ 講評

当日は、長谷川学長、取組担当者の富士副学長、WGリーダーの谷川教授、山北教授、藤井教授、近藤事務局長、木田教務課長の教職員と7名の学生が出席し、対応しました。

### 現地調査の結果は？

現地調査の結果の主な内容は、次の通りです。

#### ●取組の概要

教員の教育活動をPDCAサイクルに基づいて実施することにより教員の授業改善を行うことを目的に、授業改善のためのPDCAサイクルを半自動化する自律的FD推進モデルおよびそのモデルに基づく支援システム（CANVAS）を開発する。最終年度には、CANVASを全教員で試行し、プロジェクト終了後の本格的な運用の準備を整える。

## ●取組の特徴

P D C Aサイクルを半自動化する自立的F D推進モデルを構築し、すべての教員が日々の教育活動の中で授業改善の支援を受けることができるF D支援システム「C A N V A S」を開発し、活用している。

授業改善のための情報を共有し、P D C Aサイクルを組織的に回すため（主に教員向け）に「C A N V A S」を利用し、I C Tを利用した授業そのものの支援（主に学生向け）には、学習者適応型e-learning システム「P O L I T E」（平成17年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」）を活用している。

## ●取組の成果

全教員が「C A N V A S」を利用して、ピアレビュー、授業改善計画およびシラバスの作成を行った。

学生F D委員会の一員として参加した学生たちが一定の役割を果たし、大学の教育改善に参加していることは評価に値する。

授業でのI C T活用形態の当面の目標を、「P O L I T E」等を活用した教材の提示、小テスト、課題などと設定したところ、その活用レベルに達した教員が平成20年4月は5%であったのに対し、平成23年9月の調査では52%にまで上がった。

## ●大学等の教育への波及効果

C A N V A Sシステムを利用することにより、すべての教員が録画された自らの授業を授業後に振り返ることが可能であり、授業改善に大きく寄与することが可能である。

課題ごとにワーキンググループを構成し、リーダーを中心として、各学科から委員を出す方式により、多くの教員にプロジェクトの中で役割を与え、参画意識を持たせる方式は、一部の教員だけが参加することを回避し、自学の教育についての現状認識や危機意識の共有などを持たせることが可能であり、他大学等の参考となる方式である。

I C Tの利活用の仕方により、教員個人としても、大学としても問題を改善・解決できる可能性があるということについて、他学にとっての良き事例となる。

## ●その他特筆すべき事項

「C A N V A S」を利用したP D C Aサイクルを実施していない教員へのフォローを継続して行い、改善していくことが望まれる。

学習成果をどのように確認していくのかが、今後の課題であり、また、学生のフルe-learning等の活用度に個人差が見られるため、その存在の周知、活用方法等についてより積極的に広報していくことが望まれる。

授業評価アンケートのとりまとめ結果など、学生に対するフィードバックの方法を改善していくことが望まれる。

これらの内容は、次のURLで情報公開されていません。

・文部科学省掲載アドレス；

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/gp/program/1314197.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/gp/program/1314197.htm)

・日本学術振興会掲載アドレス；

<http://www.jsps.go.jp/j-goodpractice/kekkahoukouku.html>



現地調査の様子

## 現地調査を受けて？

「ICTによる自律的FD推進モデルの構築」によってFD支援システムが実現し、学生による授業評価アンケート、ピアレビュー制度、GPA制度、コンピテンシーに基づくカリキュラム編成等の制度も整備が進められています。今後の課題は、これらをいかに各教員が授業改善のために活用し、学生の学習成果に結び付けていくことではないでしょうか。



システム情報学科 中島 潤

米国にはICTの戦略的な利用を推進することにより高等教育機関を高度化することをミッションにした「EDCAUSE」という非営利団体があり、毎年大規模な年次総会を開いています。EDUCAUSE年次大会には、この数年間毎年数名ずつの教員が本学から参加していますが、今回は私が指名され、1名のみで参加してきましたので、その様子を簡単に報告したいと思います。

EDUCAUSEについては既にご存じの方も多と思いますが、「情報技術の効果的な活用を後押しすることで、高等教育の発展に寄与する」ことを目的に、米国を中心とする博士課程を持つ総合大学からコミュニティ・カレッジまでの広い範囲の校種の大半が加盟している団体です。法人会員は、2200以上（うち米国2048、カナダ97）のカレッジや総合大学などの種々の機関にまたがり、約250の企業会員を含み、参加している個人メンバーは17,000人以上とのことです。いわゆる学会とは異なり、教員や研究者ばかりでなく、大学の経営陣、コンピューティングセンターのスタッフ、教育開発部門、図書館司書、教員・研究者など様々な職種にわたっているのが特徴と言えるでしょう。このように、EDUCAUSE

はICT教育の情報交換の拠点であると同時に、高等教育の種々の部門の人々のコミュニティともなっています。今現在、EDUCAUSEには、日本からも、京都大、九州大、名古屋大、大阪大、放送大などという日本を代表するような大学の中に情報大も名を連ね、全9大学が加盟しています。

私が参加して来たのは、年に一度開催される年次総会で、2011年10月18日から21日までの4日間、米国ペンシルバニア州のフィラデルフィアで開催されました。フィラデルフィアは、約130km北東にニューヨーク、200km南西にワシントンDCという場所にあり、世界遺産でもある独立記念館や自由の鐘で有名な、米国で最も古い街の一つで、人口約152万の全米第5位の大都市です。

会場のペンシルバニアコンベンションセンターは、会場の端から端まで徒歩で10分はかかるような巨大施設ですが、その大半を大会のために利用されていました。今年度の大会参加者は、主催者発表によると、会議参加登録者約4700名、展示会の入場登録者約8000名を集める大規模なものでした。日本からも約15大学、3企業が参加し、総勢約50名位が来ていました。

EDUCAUSE年次大会は、「専門家能力開発の機会」の一つと位置付けられているようですが、ここでの専門家には、ITエンジニアだけでなく、学長・副学長、理事などの大学経営者層、事務職員、技術



写真1 開場全景



職員、図書館職員、教員や研究者などの各種の専門家など、広い範囲の職種の人が含まれます。実際かなりの数のCIO (Chief Information Officer) クラスの役員が多数参加しに来ており、参加登録者の名簿を見ると、CIOとSr. IT Leaderだけで 863名も全米から集まって来ることが驚きですし、それだけ教育へのICT活用に米国の大学の経営者層が大変大きな関心をもっているという現れだと思えます。

大会では、3つの基調講演、20の主要講演 (Featured Sessions)、250を超える一般講演の他、ショートトーク (Lightning Rounds)、小グループでの情報交換 (Birds-of-a-Feather Sessions)、ラウンドテーブル、ポスターセッション、セミナー、ワークショップ、それに360以上の企業展示ブース、デモ、などが企画されていました。一般講演は、教育と学習、大学経営、e-研究やe-学習、ITとリーダーシップの役割、大学業務システム、ポリシー、サイバーセキュリティ、職能開発、認証管理、などテーマが多岐にわたっています。

EDUCAUSEの年次大会の参加は初めてでしたので、例年との比較こそ出来ませんでした。私が感じたところでは特に、①ICTコストの削減、②スマートデバイス、③eTextbook・デジタル教科書、に関心が集まっていたと思います。①に関しては、キャンパスクラウドを構築しコスト削減を実現した成功事例を中心に、キャンパスクラウドを支えるハイブリッドクラウド、インフラ構造改革、大学の競争力を高めるクラウドへの道 など、多くの大学が抱える共通の課題である「経営力強化」や「教育・研究の向上による競争力強化」などに対応するためのクラウド導入の戦略、学内での懸念点やそれに対する対応、クラウドのメリット、導入時に検討すべき点、などのセッションに参加者が多かったようでした。また、大学の事務情報化、情報系職員のキャリ

アパス、ソフトウェアライセンスの契約・管理等についても、率直な意見交換や情報交換がなされていました。

②に関しては、iPadなどのスマートデバイスを教育現場で活用するための環境構築の一貫としてのスマートデバイス用LMS (Learning Management System) 構築事例や、教材作成サービスなどの講演が多かったようです。また③に関しては、OCW (Open Course Ware) やソーシャルラーニングプラットフォーム、オープンソーステキスト、ePubを含め、デジタルテキストの制作、出版、公開、著作権問題など、テキストの電子化に関わる問題に関心が集まっていた様子でした。

会場では、参加者の大半がスマートデバイスやノートPCを手にし、Twitterで「このセッション面白い」「もう会場満杯です」「この発言をRT (Retweet)」などと情報交換したり、主催者からの連絡事項もTwitterで流れてくるなど、会場は先進的な国際会議の雰囲気にも包まれていました。学会の堅苦しい雰囲気とはまた異なり、参加者への暖かい歓迎の気風に溢れ、情報資源、知識、ノウハウや環境など、あらゆる面での組織間の協力関係や情報交換が重要であるということが信念であるように見え、しかも米国国内に留まらず、どの国の人々に対してもオープンであることがよくわかりました。

誌面の都合により、全てをここで報告することは出来ませんが、今回、EDUCAUSE年次大会に参加する機会を与えていただき、本学における教育へのICT活用を考える時にヒントになりそうなアイデアを沢山見つけてきましたので、近い将来のいつか、実際に情報大で役立てて行きたいと考えております。



写真 2 講演会場の風景



写真 3 展示会場の様子

## 平成23年度「学生満足度調査」概要

学生部長 梅津 真

昨年(2011年)、点検評価委員会の「中期目標・中期計画・平成23年度計画」の一環として満足度調査委員会が立ち上げられ、9月20日から10月7日にかけて、9年ぶりに本格的な「学生満足度調査」が実施されました。調査対象は本学学部生(1年～4年生)と大学院生(修士課程1年～2年生)で、調査方法は実習室を使用する授業および自宅のパソコンなどにより、Web上のアンケートに回答してもらう形をとりました。本調査は、本学の学生が教育内容や学生生活全般にわたってどのような意見や要望を持っているかを正確に把握することを第一義とし、データは今後の教育内容の充実、学生サービスの向上に役立てるための基礎資料になります。有効サンプル数は以下の通りですが、回答率が約50%で、前回(73.1%)よりかなり低めだったことは、アンケートの周知徹底度、各教員の協力体制が不十分だったということで、今後課題を残しました。

### ・所属別

	回答数
全体	753
先端経営学科	102
システム情報学科	197
医療情報学科	139
情報メディア学科 メディアデザイン専攻	123
情報メディア学科 メディアテクノロジー専攻	184
大学院	8

### ・学年別

	回答数
全体	753
1年	209
2年	288
3年	133
4年	116
修士1年	5
修士2年	2

### ・性別

	回答数
全体	753
男性	618
女性	135

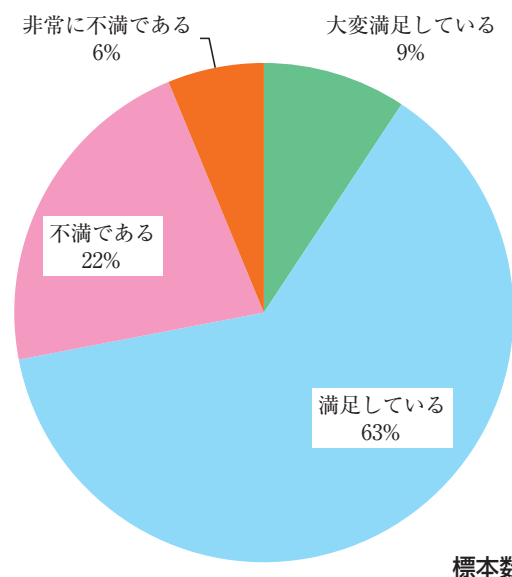
アンケートの内容は、大まかに「入学に関して」、「教務関係」、「教育施設」、「厚生施設」、「学生生活全般」の5項目(質問項目は全部で51)に区分され、最初の「入学に関して」は必須

回答にしました。詳細については「平成23年度学生満足度調査報告書」という形でWeb上に公開されていますので、そちらをご覧くださいとして、ここでは特に目についた点だけ指摘したいと思います。

最初の質問「北海道情報大学に入学して良かったですか」に関しては、「大変満足している」と「満足している」を合計したパーセンテージ(=肯定的評価)が72%に達し(グラフ1参照)、前回(平成14年度)の満足度を尋ねた項目(「あなたは全般的にみて、現在在籍している学部・学科に満足していますか」)の42.7%と比べると約30ポイント上昇しています。

【グラフ1】

質問1：あなたは北海道情報大学に入学して良かったですか。

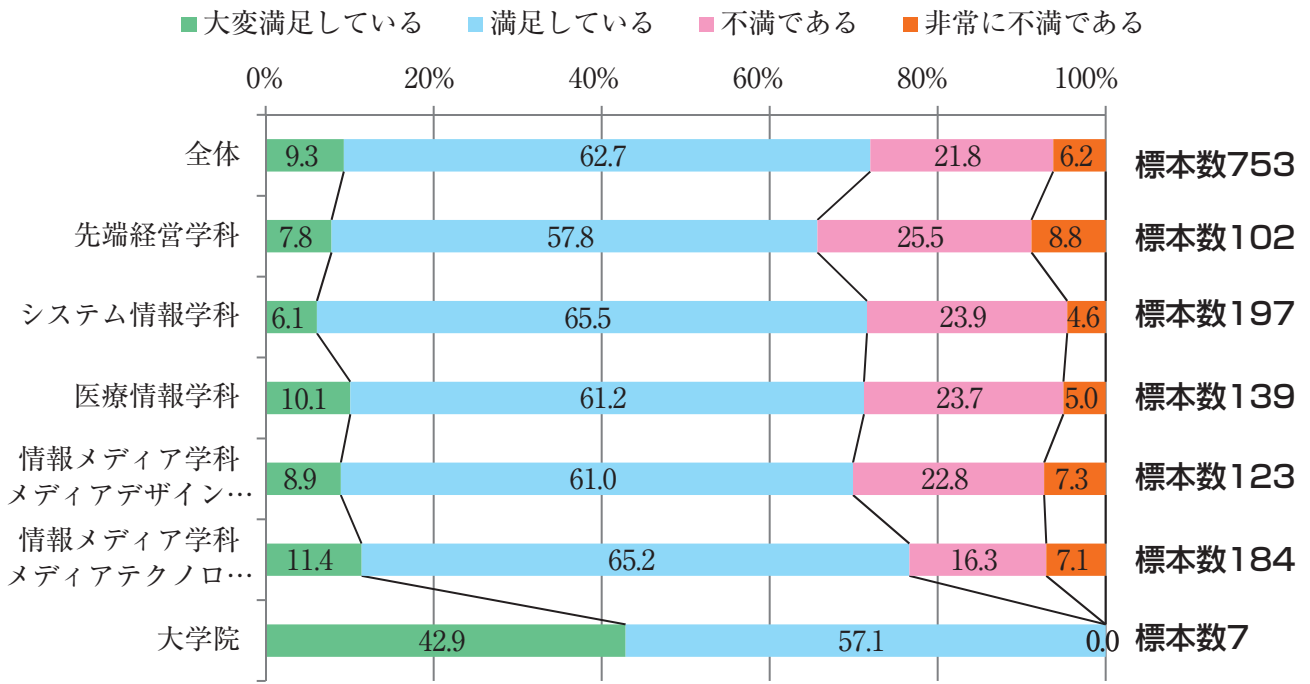


学科別に見るならば、先端経営が65.6%、システム情報が71.6%、医療情報が71.3%、情報メディア学科メディアデザイン専攻が69.9%、同メディアテクノロジー専攻が76.3%で、先端経営とメディアテクノロジー専攻の間には10ポイント以上の開きがありました(グラフ2参照)。学年別では1年生が78.9%と最も高く、2年生が67.7%、3年生が68.4%、4年生が72.4%で、1年生と2年生では11.2ポイントの差がありました。

この他、紙数の関係でここでは紹介出来ませんが、「教務関係」、「教育施設」、「厚生施設」、「学生生活全般」などの項目も肯定的評価が70～80%の高率に達しており、満足度調査委員一同ホッと胸をなでおろした次第です。またサンプル数は少なかつたものの、大学院の満足度が非常に高く、その充実ぶりが窺われました。もちろん不満な点を具体



【グラフ 2】

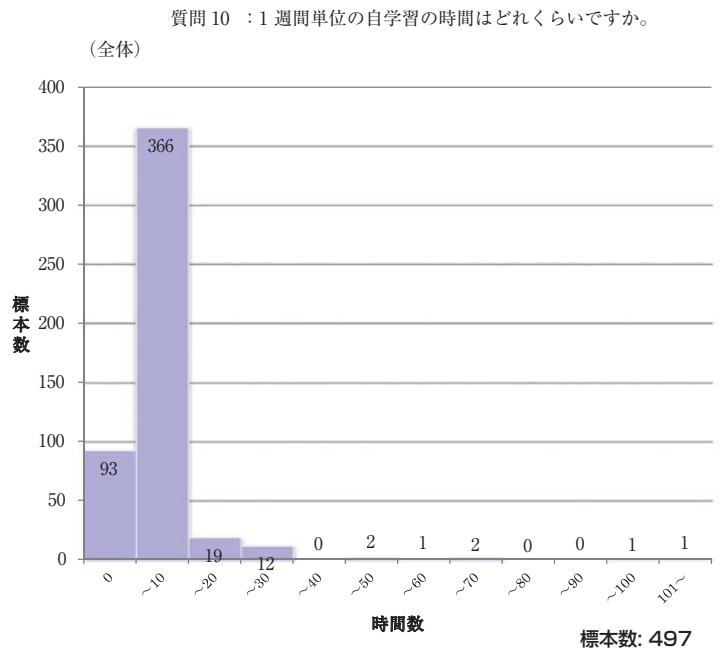


的に書いてもらった自由記述を見ると、改善すべき点はまだまだたくさんありますが、全体的な満足度は格段に向上しており、これは各教職員がこれまで努力して来たことの成果と見なしていいと思います。また設備面でeDC タワーが出来たことも大きなプラス要因になったと考えられます。

カリキュラムに関しては、教養科目に対しては77%、専門科目に対しては79%という肯定的評価が得られました。ただ講義を聴く上で自分の力が足りないと感じている学生が81%に上り、大学院生を除いて学力低下が懸念される数字となりました。学部生の一週間単位の自学習時間を見ると、0時間が18.7%、1~10時間が73.7%となっています（グラフ3参照）。一年生だけに限って見れば、0時間が26.5%、1~10時間が68.1%になります。因みに2012年2月16日付の「日米の大学1年生の学習時間」の記事（朝日新聞）によれば、0時間の学生が日本では9.7%、アメリカは0.3%、1~10時間が日本は75.5%、アメリカは41.3%ですから、その差は歴然たるものがあります。逆に言えば、一週間に10時間以上自学習する学生（1年生）がアメリカでは58.4%いるのに対し、日本では14.8%、本学では5.4%しかないということになります。アメリカの学生に比べて、日本の学生がなぜ、これほどまでに勉強しなくなったのかという原因分析はさておき、学習習慣のない学生をいかにして「勉学」に向かわせ、国際的に通用す

る「学士力」を養成すべきか、という難題を突き付けられた格好です。

【グラフ 3】



自由記述には様々な不平・不満が見られますが、全体的満足度は「優」に近い「良」のレベルと見て良さそうです。詳細を知りたい方は報告書に目を通して頂ければ幸いです。最後に、膨大な量のデータ処理を引き受けてくれた黒田学君と高橋基君の両名、ならびにその指導に当たってくださった中島潤先生に、この場を借りてお礼申し上げます。

**Composition & Cause**

Working Group 5の目的はイベント運営・教育活動支援情報の提供です。新任教員研修、その他working groupの研修会、イベント等を支援する為のグループです。メンバーは各学科と事務職員から成り立っています(5+1)。

メンバー

システム情報	サイモン・ソーラ (リーダー)
医療情報	後藤 雄太
先端経営	小西 二郎
情報メディア	島田 英二
事務	木田 洋
(オブザーバー)	近藤 始

**Collaboration**

今年度、私たちは特にWG4とICTなどの他のワーキンググループと積極的にコラボレーションを行いたいと考えております。もうすでに私たちはWG4とCANVAS(教育活動支援システム)について新任教員向けのワークショップを4月19日に行うことが決定しています。また5月末にはPOLITEについても同様にワークショップを行う予定です。このような活発な活動を今後は他のワーキンググループともぜひ行っていききたいと思っています。

**New Academic Staff Professional Development #1**

毎年最初の大きな活動は、新任教員研修会です。この研修会は年に2回行っています。毎年第1回目の研修会の内容はミニ講義の形式+グループディスカッション/Q&Aタイムです。ミニ講義では担当者が直接講義をしますが、欠席した方は録画にてミニ講義を受講します。コンテンツの内容は 学生指導、FD、教職員向けウェブサイト、情報大学の学生について、学習支援センター、セクハラ・アカハラについて、そして会計・研究費について講義の予定です。この研修会の内容に対する、今まで新任教員の方の評価はおおむね好評であり、全員が満足したと聞き、本研修会が有意義であることを改めて再確認できました。内容については4年間ほぼ変わってはいませんが、このように満足度が高い内容のため、今年度も同様の研修内容で実施していきたいと考えております。またアンケート結果を踏まえ、今年度はゴールデン・ウィーク前後に実施します。

**New Academic Staff Professional Development #2**

前述のとおり毎年第1回目の新任教員研修会は、ほぼ同じテーマで行われました。反対に第2回目はその年度の新任教員の要望を反映したり、学内のFD活動の状況に合わせてテーマを設定しました。例えば第一回目は建学の精神や設立の経緯等について、第二回目は 情報大の歴史について、第三回目はeDCグループとICT活動研修について、第四回目は北海道情報技術研究所と公開講座等についてでした。今年度は新任教員のニーズに合わせた



と思いますが、おそらく23年度のような研修会を実施する予定です。

なぜテーマが頻繁に変わるかという点と新任教員教員のニーズに合わせるだけではなく、他のワーキンググループでの活動やオリエンテーションとできるだけ違う内容を提供したいからです。



### Information Dissemination

今、四年前に考えたことを再び挑戦したいと思っています。つまりカラー表示形式のイベントカレンダーを教職員ポータルサイトに構築したいと思っています。年々大学の規模は大きくなっているので、教職員全員が共通で見れるウェブサイトにおいて大学行事等が一度に理解できるカレンダーがあれば、とても価値があると思います。

今まで本部棟から厚生棟への2階渡り廊下にあるFD関係イベントボードに作成した各FDイベントの告知ポスターは80枚以上になりましたが、昨年度はそのうちの5枚しか張っていないので、今年もっと利用したいと思っています。また、できれば今はローテクなポスターを貼っていますが、液晶モニターなど導入できればもっと良いと思います。なおFDのウェブサイトももっと活動的に利用されたいと思います。

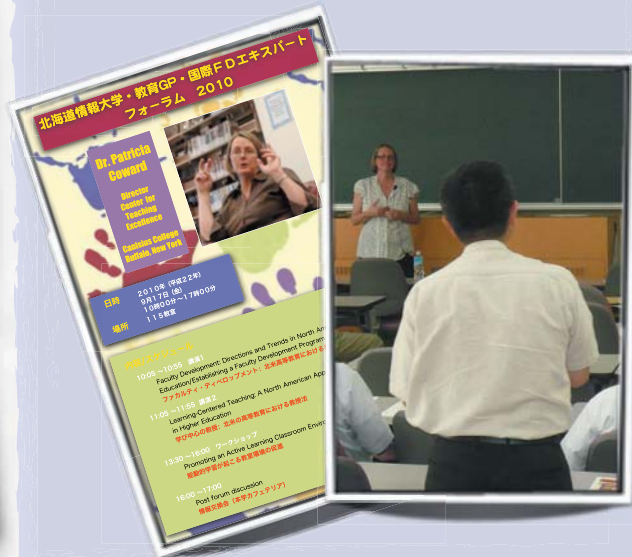


### Main Event

このWGにとって、24年度最大の行事は「北海道情報大学・国際FDエキスパートフォーラム 2012」です。2年前、9月17日(金)に「北海道情報大学 教育GP 国際FDエキスパートフォーラム 2010」というフォーラムを行いました。米国のニューヨーク州にあるCanisius Collegeの優秀なファカルティ・デベロッパーによる講演とワークショップを行いました。



午前の講演では、(1)アメリカにおける、FDに関する組織的な取り組みの展開、(2)学習者中心の教授法の原則やそれを実践する際のポイントに関する説明がありました。その上で、午後のワークショップでは、能動的学習の定義や効果、特徴等に関する説明とともにその実演がされ、参加者が実際に能動的学習を体験することができました。今年度、できるだけ同じようなダイナミックな講習者とテーマをしたいと思いますが、まだ調べているところです。



医療情報学科 教授 上杉 正人

本学では3年生になると各専門教員のゼミに配属される。これは大学生として2年間の勉学を元にさらに自己に磨きをかける重要な場であり、ゼミの教員がどのような人物であるかはもちろん、どのような先輩が所属しているかなども大事なゼミ決定要因になる。

医療情報学科は2006年に新設された学科でゼミの歴史はまだ3年程度と浅く、ゼミの決定は試行錯誤してきた。当初ゼミの決定は、各教員からのゼミ紹介や配布資料、それに各教員の研究室訪問により面談を行い、学生はいろいろゼミに関して情報収集したうえで希望ゼミを第7候補まで出し、最終的に成績順で決定されていた。しかしこの決定方法では成績上位の一部の学生のみが希望のゼミに行けるだけで、ほかの大多数の学生には不満が多い決定方法であった。そこで翌年のゼミ決定方法は、希望ゼミを学生や教員にオープンにする方法である。廊下にホワイトボードを設置し、各自が希望するゼミ欄に氏名を書くというものである。学生が集中するゼミでは、希望学生の中で話し合いを行い同意の上で第2希望のゼミに移動する。これにより学生全体のゼミ決定の満足度は当初に比べ向上した。しかし学生のゼミ決定の行動としては、2年生の時に授業を持つ教員にどうしても集中し、講義を持っていないあまり知られていない教員には学生の希望が少ない傾向が見られた。さらにゼミもこれまで3年が経過してある程度そのゼミの雰囲気、ゼミの方法や目的が固定してくると学生側からいろいろな要望も聞かれるようになった。本学科は道内の大学で唯一診療情報管理士を取得可能な大学であり、また医療と情報を柱とした教育を行っていることから医療情報技師の資格取得などに力を入れている。こうした資格取得対策が主体のゼミがあったり、卒業論文の指導についての不満が聞かれたり、あるいはゼミの実施に対して格差があったり、様々な意見が学生から上がっていた。こうした問題やゼミの特徴をゼミの選択前に知ってゼミを選ぶことができないか、その当時医療情報学科の学生FD担当の井内君と土井君がいろいろと検討した。彼らは各ゼミの雰囲気や運営方法を先輩から後輩に伝える機会を作ってはどうかと発案した。そして実際にゼミ説明会を企画実行した。



医療情報学科学生FDの井内君（左）と土井君

これまでの教員からの一方的な説明では、ゼミのテーマや研究の概要は理解できたとしても、ゼミの運営方法や雰囲気は理解できない。また、そのゼミにどのような先輩がいて、どのようなテーマの研究を行っているのか知ることができない。そこで先輩から後輩に直接ゼミの雰囲気や特徴などを細かく聴ける場ーゼミ説明会ーを開催することにした。

2011年1月に医療情報学科のみで最初のゼミ説明会が開催された。この説明会のルールは、事実を率直に説明すること、他ゼミの誹謗中傷はしないことであった。各ゼミの代表者は各教室（1ゼミ1教室）に分かれ、2年生が興味あるゼミの教室を訪問する形態をとった。このとき集まった学生は24名で、一つのゼミについて15分の説明を受けることができ、最大4つのゼミの説明を聞くことができた。説明会後に参加者全員から集められたアンケートには、先輩からゼミの話が直接聞けたこと、全部のゼミの話を聞いたかったことなどがあげられゼミ説明会は大変好評であった。この効果として、ゼミの希望者数もゼミ間である程度均等化され、希望学生の多いゼミから他のゼミへの移動もスムーズに行われた。

本学は全校生約1,500名程度の小規模な大学であるが、学生間の交流はそれほど多くなく先輩が後輩に何かを具体的に説明する場は非常に少ないように感じている。そこで今年度はゼミ説明会を全学的な取り組みとして学生FDが取り組み、先輩から後輩にゼミの様子を伝える場を作った。ゼミ説明会の日程は2011年12月22日から本年1月26日まで毎週木曜の3



学科名	学生数	参加者数	アンケート回収率	ゼミ説明会に参加して、欲しい情報を得られたか	今回のゼミ説明会はゼミ決定の際に役立つか
情報メディア	205	101(49.0%)	75.0%	97.2%	100%
医療情報	72	47(65.3%)	66.0%	93.5%	93.5%
先端経営	72	23(31.9%)	69.6%	93.8%	100%
システム情報	143	34(23.8%)	91.2%	93.5%	100%

講時に情報メディア、医療情報、先端経営、システム情報がそれぞれ開いた。各説明会への参加者数およびアンケートによる調査結果の一部を表に示す。

参加者数は今年2回目となる医療情報学科が47名、学科学生数の65.3%が集まった。また、情報メディア学部は学生数の約半分の101名が集まった。先端経営とシステム情報の両学科は後期試験の週とその前の週であったため参加人数は3割前後とふるわなかった。開催時期についてはもう少し検討する必要がある。

ゼミ説明会終了時に行ったアンケート調査では、「ほしい情報を得られたか」という質問に9割以上の学生が「はい」と答えている。また、「ゼミ決定の際に役に立つか」という質問に医療情報学科以外の学科では全員が「はい」と答えている。このアンケート調査結果から参加した学生のゼミ説明会への満足度が高いことを示している。



ゼミ説明会風景

学生FD活動は学生の立場から授業改善について考える活動であるが、何気ない普段の疑問から出発することは重要である。ゼミはどうやって決めるの？

という疑問から始まりゼミ説明会が企画された。そこで先輩から説明を受けて希望するゼミを決める。この一連の流れがゼミへの学生のモチベーションの向上に繋がり、ゼミ自体の活性化にも繋がると考えられる。直接的に授業を改善するという活動ではないが、学生のモチベーションが向上することはゼミの活性化や改善に繋がるはずである。

今回はゼミ説明会の開催時期をゼミ決定時期に合わせてながら日程を調整して多くの学生が参加できる場にしていきたい。また、先輩から後輩に情報を伝える場としてより効果的に伝える技術も学生に学ぶ場としても意義があると考え。本学は学生が1500名程度の比較的小規模の大学であるが、こうした取り組みができるのは小規模校だからこそできるであろう。説明会の準備に際して学生FDメンバーは本当に大変だったと思うが、多くの学生が参加してくれたこととアンケートの評価が良かったことが今後の彼らの活動にプラスに働くに違いない。これからも授業改善のためのいろいろな企画を立て、継続した学生FD活動を彼らに期待したい。学生FDメンバーの高いモチベーションが広く学生に伝わり、結果として授業への関心やモチベーションの向上、そして授業の変化・改善に繋がっていくことを願っている。



情報メディアのゼミ説明会準備風景

ゼミ説明会は先輩が後輩にゼミの内容を伝えるだけでなく、他にもゼミ説明会のメリットが存在した。自分のゼミを紹介するために先輩ら自らが準備をしてゼミ説明会に向けて取り組んだ。あらためて自分のゼミの特徴やゼミ運営方法などを見つめ直す機会ではなかったのではないだろうか。

## FD活動 行事（実績）（平成23年度後期・平成24年度前期）

日 程	行 事
10月18日(火) ～10月21日(金)	国際会議 EDUCAUSE 2011 参加 米国 ペンシルベニア州 フィラデルフィア
12月1日(木)	2011年度第2回新任教員研修会
12月22日(木)	学生FD 情報メディア学科の合同ゼミ説明会
1月10日(火) ～1月30日(月)	平成23年度 後期授業評価アンケートの実施 平成23年度 「学生が選ぶ教え上手な先生」の投票
1月12日(木)	学生FD 医療情報学科の合同ゼミ説明会
1月19日(木)	学生FD 先端経営学科の合同ゼミ説明会
1月26日(木)	学生FD システム情報学科の合同ゼミ説明会
2月11日(土)	第1回054Time！（おこしタイム）～学生交流会in札大～ 学生参加
3月2日(金)	2011年度北海道情報大学FDフォーラム
4月19日(木)	ICT研修会（CANVAS）（予定）
4月26日(木)	2012年度第1回新任教員研修会（予定）

## FD委員会WGの活動実績（平成23年度後期）

WG名	月例ミーティング等
全学教務・FD委員会	10/26(水)、11/30(水)、12/21(水)、1/25(水)、 2/29(水)、3/28(水)
WG1（学生による授業評価アンケート）	11/11(金)、2/22(水)
WG1（学生FDの活動）	10/6(木)、11/24(木)
WG2（ピアレビュー制度の導入）	10/18(火)
WG3（GPAとコンピテンシーの導入）	11/1(金)
WG5（イベント・教育活動支援情報の企画）	11/17(金)、1/24(木)
WG9（Own Teacher制度の導入）	12/16(金)
学生FDとの連絡会議	1/11(水)、2/8(水)、3/23(金)
スタートアッププログラム小委員会	2/14(火)、2/24(金)
卒論の書き方作成WG	10/11(火)、10/25(火)、2/23(木)、3/13(火)、 3/21(水)
iPad（タブレットPC）導入検討WG	1/19(木)、2/9(木)、2/24(金)、3/12(月)、3/26(月)

### 編集後記

「教育GP」の時代から多角的かつ精力的に行われてきたFD活動も、安定した活動に移行してきた感があります。私が関係するGPAも軌道に乗ってきて、当面は完成年度に向けてデータを蓄積しているところです。安定してきたといえども、FD活動は進化し続けるわけで、今後も逐次発展して行くことでしょう。皆さんと力を合わせ少しでも良い大学にしていきたいと思っております。

WG3リーダー 豊田 規人